

2026 年度

国 語

(2 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50 分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

清泉女学院中学校

〔一〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

マルハラという言葉が、2024年の春、新聞やテレビ、ネットを賑わせた。マルとは句点のことで、マルハラスメントを略してマルハラ。中高年がLINEなどのSNSで送信する際、文末に句点を付けることが、威圧的に取られるという話だ。「連絡をください。」「わかりました。」等の句点が、若者には怒っているように感じられるらしい。

いやはや、なんでもハラスメントになる時代だと驚く。と同時に、世代間でのギャップがコミュニケーションの妨げになるのだとしたら、お互いの感覚を理解して、円満にやりとりをしたいものだとも思う。これはハラスメントというよりは、わりとシンプルな誤解ではないだろうか。

若者が、LINEの会話に句点があることに違和感を抱くのは、それが限りなく話し言葉に近いと思っ

ていていると、あえて付けたように感じてしまう。たとえば日常会話で「わかった」ではなく「わかった、以上!」と言われたような感じではないだろうか。後者には「もうわかったから、このことにいつまでも拘泥するな」的なニュアンスが漂う。

いっぽうで中高年世代にとっては、LINEといえども画面に文字が出る以上、あくまでそれは書き言葉なのだ。書き言葉であるならば、文末には句点を打つのが当然であると思ってしまう。

もちろん若者たちも、いっさい句点を使わないわけではなく、学校のレポートや会社内でのメールなどでは、文末にマルを入れているはずだ。Ⅱ、そこがどういう場なのかの認識の違いである。普段着であいさつしに來たつもりが、年上の人がスーツ姿で現れたら、居心地が悪いし、なんだか自分の服装をとがめられたような気持ちになる。無言の圧力……それがハラスメントと感じられるのではないだろうか。

私は、若い世代とのやり取りでは、一文やひと言で済むときには句点を省略し、長めの文章になる時は付けている。日常的にやり取りしていれば、この人はこういうルールなんだと伝わるので、さほど神経質にならなくてもいい。お互いのルールや感覚を探りあっているときには、年代の違いを考慮するのは有効だと思う。

Ⅲ、マルハラの少し前に「おばさん構文」というのも話題になった。長文で、やたら絵文字や句読点が多いというものだ。ここでも句点が、マイナスのイメージで捉えられている。

そこでふと、自分の短歌を思い出した。日本語って、○で終わるんだな、それってなんだか素敵なことだと思ひ、詠んだ一首だ。世の中の的に

は分の悪い句点だが、こういう見方もできるのでは？ と思い、^{※1}Xに投稿した。

句点を打つのも、おばさん構文と聞いて…この一首をそつと置いておきますねー

優しさにひとつ気がつく ×でなく○で必ず終わる日本語

ちょうどマルハラの話題と重なり、またたくまに10万を超える「いいね」がついた。朝日新聞や毎日新聞、読売新聞のコラムでも、マルハラの問題にからめて取り上げられ、反響の大きさに自分でもびっくりした。みなさん若者に気をつかいながらも、どこかで「マルをつけたい」「句点があるほうが落ち着く」「そんなつもりでマルじゃない」と感じる人が多かったのかもしれない。モヤモヤを抱えていたところに「マルで終わるって日本語の優しさでは？」という一首のメッセージが、ダイレクトに届いたようである。

リプライや引用リツイートには「私の文章も、こういう気持ちで見てほしい」○は怖くない。実は優しい！「おじさんも助けてくれて、ありがとう」等々、中高年からの喜び(?)の声があふれていた。一首の短歌が、どんなふうになんかに手渡されていくか、可視化されるのがXの醍醐味のひとつだ。ちなみに、ここまで拡散されると、もちろん思いがけないリプライも付く。多かったのは「Xで終わる言語があるんですかね」というもの。いちおう反論というか補足をしておくと、「Xでなく」とは、「今から句点の○を、○Xの○と見立てますよ」という伏線としての表現である。

マルハラ問題にもうひとつ日本語らしい観点があるとする、「曖昧表現が好き」というのが考えられる。若い人が「句点で言い切られるのが怖い」というのは、裏返せば「言い切らないで柔らかく終わったほうが優しい」という感覚だ。

三十年ほど前になるが、若者の「とか弁」というのが話題になった。「映画とか見て」「アイスとか食べて」といった言い回しだ。映画以外は見てなくて、アイス以外は食べていなくても、こういう表現をする。それまでは「とか」と言えば、並列や列挙に用いるものだった。「トマトとかピーマンとかを育てています」といった具合に。今では大辞泉にも、二番目の用法として「断定を避け、あいまいにするために語の後に付ける。『学校とかから帰る』『補説』1990年代前半から若者の間で使われ、すぐに大人にも広まった。多用する話し方を『とか弁』ともいう。」と記されている。

あつという間に定着した背景には、日本人の曖昧好みがあるだろう。当時、とか弁に対して渋い顔をしていた大人たちだって「今度の日曜あたり、

ゴルフでもしませんか」というような言い方を好んでしていた。月曜にテニスをすることは、ありえないのだが「今度の日曜に、ゴルフをしませんか」と言うと、ソフトさに欠ける。それと同じ理由で、よりふんわりした表現として「とか弁」は愛され広まった。

⑤ 似たような例は他にもあって「こちら、ピザトーストになります」の「なります」や、「メニューのほう、おさげします」の「ほう」などなど。「ピザトーストです」「メニューを」とはつきり言わないほうが、まどろっこしいが丁寧な印象になる。

文末の断定というところで言うと「会議を始めます」「会議を始めさせていただきます」「会議を始めさせていただきます」と思います」の順に、だんだん婉曲さが増していく。始めるということに変わりはないのだが。これがLINE等の文面で「会議を始めます。」となると、もしかしたら若い人には、「会議を始めます。(キッパリ! 文句あつか?)」というニュアンスに見えるのかもしれない。

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚

問一

I	Ⅲ
---	---

 に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、それ

ぞれの記号は一度しか使えません。）

ア また イ ところが ウ なぜなら エ すると オ つまり カ だから

問二 — 線A「醍醐味」・ — 線B「婉曲さ」の言葉の意味としてもっともふさわしいものはどれですか。後の中から一つずつ選び、記号で答え

なさい。

A「醍醐味」

ア 物事の本当の楽しさのこと。

イ 予想外なことに對する驚きのこと。

ウ SNSにある深い味わいのこと。

エ 短歌を詠む嬉しさのこと。

オ 言葉に對する鋭い指摘のこと。

B「婉曲さ」

ア 表し方が丁寧であること。

イ 表し方がややこしいこと。

ウ 表し方が不快であること。

エ 表し方がおもしろいこと。

オ 表し方が遠回しであること。

問三 — 線①「ハラスメントというよりは、わりとシンプルな誤解」とありますが、これはどのようなことですか。もっともふさわしいものを

次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 若者がLINEの文章に句点をつけないのは、マナーが悪いのではなく、相手と気軽にやりとりし合おうとしているのだということ
を中高年世代が分かっていないということ。

イ 中高年世代の文章の末尾に句点があるのは、若者に怒っていることを表しているのではなく、円満にやりとりをするためであること
を若者が分かっていないということ。

ウ 若者の書く文章に句点がないのは、相手を怒らせようとしているのではなく、それが彼らにとって当然のことであるからだというこ
とを中高年世代が分かっていないということ。

エ 中高年世代がSNSの文章の末尾に句点をつけるのは、怒っているのではなく、そうすることが自然であると思っただけである
ことを若者が分かっていないということ。

オ 世代間で句点をつけるかどうか異なるのは、彼らの文章力の問題ではなく、自身の書き方のルールに従っただけだということを
お互いに分かっていないということ。

問四 — 線②「そこ」とありますが、これは何を指していますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 句点を打つのが当然とされる場。 イ さまざまな年代の人がいる場所。 ウ LINEなどのSNSでの会話。

エ 学校のレポートや会社内のメール。 オ なんらかの服を着ていく場面。

問五 — 線③「ダイレクトに届いた」とありますが、これはなぜだと筆者は考えていますか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人々が関心を寄せていたマルハラについて詠んだ短歌だったから。
- イ 割り切れない気持ちを持っていた人々に寄り添う短歌だったから。
- ウ 若者に対して文句を言いたい人に同調する内容の短歌だったから。
- エ 句点に対するイメージを反転させることに成功した短歌だったから。
- オ 日本語に対する深い理解を持つ人物が詠んだ短歌だったから。

問六 — 線④「それと同じ理由」とありますが、この「理由」とはなんですか。解答らんにあてはまるように、本文から二十一字でぬき出し、初めと終わりの三字を答えなさい。

問七 — 線⑤「似たような例」とありますが、似たような例としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の行動に対してお礼を言われた際に、「別にあなたのためではない」と言う。
- イ 行く気がないイベントに誘われた際に、「予定を確認して、行けたら行く」と相手に伝える。
- ウ なにかを指示するときに、「この方法のほうがやりやすいと思います」という言葉を使う。
- エ 相手からされた頼み事を断るときに、「今ちよつと宿題で忙しくて……」と述べる。
- オ 相手が健康かどうか状態を確認する際に、「あれからお変わりないでしょうか」と尋ねる。

問八 — 線⑥「潤滑油としての曖昧表現だが、使いすぎると滑る」とありますが、これはどのようなことですか。六〇字以内で説明しなさい。

問九 次の会話は、文中の短歌「優しさにひとつ気がつく ×でなく○で必ず終わる日本語」を読んだ後の生徒二人の会話です。

あ
と

い に入る言葉としてもつともふさわしいものはどれですか。後の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

生徒A―この短歌は、文章の終わりに打つ句点を違う記号として捉えたんだね。

生徒B―そうだね、句点はプラスイメージを表すものであると捉えて、優しさとして肯定したんだなあ。

生徒A―つまり、あ ということだね。

生徒B―作者の日本語に対する鋭い感覚と表現力が分かるいい短歌だね。

生徒A―本文も踏まえて考えると、作者は い が大切だということを言いたいんだと思うよ。

あ

ア 日本語のもつ特殊性に注目して、この短歌をつくった

イ マルハラというのは人々の勘違いでしかないことを示した

ウ 句点には良いイメージしかないと言者は伝えたい

エ 句点を積極的に使った方がいいと言者は考えている

オ 句点についてのイメージをマルハラのとときは逆にした

い

ア 言葉に込められた意味を丁寧に考える力

イ 無理にでも複数の意味を考える力

ウ 物事のイメージを瞬時に切り替える力

エ 味わい深い短歌を詠むことのできる力

オ 日本語を深く味わい、裏の意味まで読解する力

問十 筆者は人々が使う「言葉」について細かく観察し、その使われ方やイメージなどについて本文で説明しています。みなさんは日常生活で何

気なく言葉を使っていると思います。しかし、何気なく使っている言葉をさまざまな点から注意深く見ていくことは、国語の学力向上のためだけでなく、物事を深く理解する力を養うためにも大切なことです。そのような「言葉」についての次の問いに答えなさい。

- (1) 〜〜線 a 「違和感を抱く」とありますが、同じ意味を表す言葉に「違和感を感じる」があります。このような、同じ漢字が二回使われる表現、つまり重複表現はおかしいと感じる人もいる一方で、おかしくないと感じる人もいます。次の文章はそれぞれ、「おかしいと感じる人の多い表現」と「おかしいと感じる人の少ない表現」の例です。

〈おかしいと感じる人の多い表現〉

- ・頭痛が痛い。
- ・馬から落馬する。
- ・食事を食べる。
- ・日本に来日する。
- 〈おかしいと感じる人の少ない表現〉
- ・歌を歌う。
- ・旅行に行く。
- ・犯罪を犯す。
- ・踊りを踊る。

これらの文章の「おかしい」と「おかしくない」を分ける要因はなんだと考えられますか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 文章全体が、想像しやすい物事を示しているかどうか。
- イ 文章全体が、ものの動きと様子のどちらを表しているか。
- ウ 重複する部分が、簡単な漢字と難しい漢字のどちらなのか。
- エ 重複する部分が、同じもの・ことを指しているかどうか。
- オ 重複する部分が、物の名前と動きのどちらを表しているか。

(2)

~~~~線b「新しい言い回し」とありますが、新しい言い回しの例として、「やばい」・「エモい」など若者がよく使う言葉である「若者言葉」が挙げられます。若者言葉は、その言葉を使っていた若者が将来老いたときに使用するかどうか、また、後の世代の若者が使用するかどうかで次の表のように分けられます。

|             | 若者が老いて不使用 | 若者が老いても使用 |
|-------------|-----------|-----------|
| 後の世代の若者が不使用 | 〈i〉       | 〈ii〉      |
| 後の世代の若者も使用  | 〈iii〉     | 〈iv〉      |

表の i ～ iv に入る語の組み合わせとしてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

|   |            |            |              |             |
|---|------------|------------|--------------|-------------|
| ア | i … 若者世代語  | ii … 言語変化  | iii … 同世代語   | iv … 一時的流行語 |
| イ | i … 若者世代語  | ii … 同世代語  | iii … 一時的流行語 | iv … 言語変化   |
| ウ | i … 一時的流行語 | ii … 同世代語  | iii … 若者世代語  | iv … 言語変化   |
| エ | i … 一時的流行語 | ii … 若者世代語 | iii … 同世代語   | iv … 言語変化   |
| オ | i … 一時的流行語 | ii … 言語変化  | iii … 同世代語   | iv … 若者世代語  |

## 〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限があるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

うー、さむい。

ダウンジャケットのえりをギュッと寄せて、顔を埋める。

ポケットに手を入れて、背中を丸めて朝の道を歩く。

丸出しの額と耳が、寒さで

I

して痛い。

街道に沿った大きなカーブにさしかかると、朝霧におおわれた天竜川が見えてくる。

いつもなら、薄青く煙る山々と、ふもとをゆったりと流れる天竜川が見渡せるのに、今朝はまるで、山の上から雲海を見下ろすような風景だ。宇野原は、天竜川をはさんだ南側の斜面の高台にあるから、見晴らしのよさではどこにも負けない。

街道や小道のあちこちに立っている道祖神や道標も、この景色とあいまっていつそうのどかに見える。

道祖神というのは、道の脇に立っている石でできた仏様みたいなものだ。悪霊の侵入を防いで、道行く人を守ってくれる神様らしい。

地区の中央を通るこの街道は静岡県に続く古道で、江戸時代には食料を運ぶ道として栄えたそうだ。峠道は足場の悪い急な坂が続くから、行き来する人たちの安全を見守るように、三十三体の観音様が祀られている。①その名が、今もいたるところで見られる。

神様を信じていないほくだけど、神様が住む里があるとしたら、きっとこんな感じかな、なんてちらりと思う。

朝霧につつまれた町々を、見下ろすときの気分は最高だ、なんてのんびりと眺めていたら……、

「優ちゃんったら、急がないと宇野原だけ遅刻するよ。地区長でしょ」

先に行く柚月に、ギツとにらまれた。

柗はちらっとぼくを振りかえったけど、さっさと行ってしまった。

柚月はぼくよりひとつ歳下の五年生。母さんたちがママ友だから、小さいときからいつも一緒だった。しっかり者でなんでもできる柚月に、ぼくは頭があがらない。

「あああ、集団登校なんて、めんどくさい。一年に二回もやんなくていいじゃん」

口からふわりとあくびが出た。

柚月にまた、ギツとにらまれた。

今日は年に二回ある、地区ごとの集団登校日。地区長のぼくは、下級生をまとめて学校まで連れていかなきゃならない。

地区長なんていうとりっぱに聞こえるけど、六年はぼくひとりだから地区長になっただけ。別に、選ばれたわけでも、人望があるわけでもない。集合場所は地区の中心にある宇野原生活センター。改築されて間もないから、そこだけ和モダンでおしゃれな感じがする。

柚月のあとを追って走っていくと、みんながもう待っていた。

「遅いぞ、優斗君」

四年生の波留<sup>はる</sup>が、くちびるをとがらせていった。<sup>②</sup>

「わりい、わりい、そんなじゃあ、出発、いざ学校へ」

ぼくは先頭に立って歩きます。

「待つて！ まだ、宇希君<sup>うき</sup>が来ていないよ」

列のうしろから、柚月の声が聞こえてきた。

宇希……、たしか苗字<sup>みょうじ</sup>は小林<sup>こばやし</sup>っていったつ。夏休み明けに突然<sup>とつぜん</sup>神奈川<sup>かながわ</sup>から、五年のクラスに転入してきたやつだ。

栗色<sup>くりいろ</sup>の長めの髪<sup>かみ</sup>、やせていて、色白<sup>いろしろ</sup>で、無口<sup>むくち</sup>で、ふわふわ歩く X やつ。

はじめてあったとき、都会<sup>と</sup>っ子<sup>こ</sup>って、みんなこんな感じなのかと思って見ていたら、すごい目でにらまれた。

「なんだよ、なんか用？」

宇希は、ねこが威嚇<sup>いかく</sup>するときみたいなこわい顔でぼくを見た。

「ようこそ宇野原へ。でもさ、よく来たよな、ここってなんにもなくて退屈<sup>たいくつ</sup>なだけだよ」

って忠告<sup>ちゅうこ</sup>してあげたら、宇希は「ふんっ」<sup>③</sup>って鼻で笑ってそっぽを向いた。

なんか、感じ悪いやつ。

宇希に集団登校があることを伝えていなかったことに気づいた優斗たちは、宇希は先に登校しているだろうと判断して、出発した。学校に着いた優斗が五年生の教室をのぞいてみると、予想通り宇希は教室にいて、ぼんやり席に座<sup>すわ</sup>っていた。

「おい、今朝は集団登校だろ。センターでみんな、おまえのこと待ってたんだぞ」

ぼくは<sup>④</sup>できるだけ不機嫌<sup>ふきげん</sup>そうに言った。

「はあ？　なんで？　事故や不審者<sup>ふしんしゃ</sup>の心配のないこんな田舎<sup>いなか</sup>で、なんのためにやるのさ。土砂くずれ対策？　それともクマよけ？」  
嫌味<sup>いやみ</sup>たっぷりに言いかえされた。

「なんだよ、その態度、ばかにすんな！」

声なんかかけなきゃよかった。いらいらする。

「感じわりいやつ、宇希って、いつもあんななの？」

廊下<sup>ろうか</sup>で出くわした柚月に、思わず聞いた。

「そう、いつもつまらなそうにしてる。なのにテストは百点ばかり。宇希君のお父さんは、飲食店をいくつも経営してて、すごいお金持ちだって噂<sup>うわさ</sup>よ」

柚月は声をひそめていった。

「げっ、なんでそんなのが、こんなところに来たの？」

「だって、今は……」

柚月は言いかけた言葉<sup>⑤</sup>を飲みこんで、あわてて首を振った。

宇希が越<sup>こ</sup>してきたのは、宇野原のまん中へんにある大きな家だ。

ぼくらはひそかに、忍者屋敷<sup>にんじやしき</sup>ってよんでいる。家を取り囲む石垣<sup>いしがき</sup>と塀<sup>へい</sup>も、大きな門も、忍者がピョンと忍びこむ、時代劇に出てくるお屋敷みたいなんだ。

「新しく家を建てられてすぐに、奥<sup>おく</sup>さんに続いてだんなさんも体をこわされてね、かなり前に娘<sup>むすめ</sup>さんのところに越されて、それからずっと空き家

「なってたみたいよ」

「って、母さんは言ってたけど。謎が多いのも、忍者屋敷の大きな魅力だ。」

「そこに、宇希の家族が越してきた。宇希のお父さんは、まだ神奈川に残っているみたいだけど。」

「まあ、ぼくには関係ないか」

「こういうとき、Y っていうんだっけ？」

「ぼくは廊下を思いっきり走って、教室にかけこんだ。」

（中略）

次の朝、昇降口で宇希にあった。

正面の壁に置かれたガラスケースをのぞいている。

そこには賞状や、優勝旗や、いろんな写真が飾られている。

宇希が見つめているのは、コト八日行事の写真だ。

「これな、来年も二月にやるんだぜ、ぼくたち子どもが中心になつてな」

うしろから声をかけたら、宇希はそうとう驚いたらしく、びくっと体を震わせた。

「これってさあ、なにしているところ？」

宇希は写真を見ながら首をかしげた。

「ぼくたち子どもだけで、地区のコトの神を集めてほうげん坂に送るのさ。コトの神っていうのは、災いの神、疫病神だな」

「ぼくはちよっと胸をはった。」

「ほうげん坂というのは、地区境にある深い谷に続く坂のこと。そこにコトの神を捨てにいくってことさ」

宇希の顔が急にけわしくなった。

「フルーっ！ 疫病神を集める？ いつの時代だよ、それ。本気で言ってる？ 信じられないや」

宇希は思いきり顔をしかめた。

「あのなあ、ばかにするのもいいかげんにしろよな。コト八日行事っていうのは、この土地で四〇〇年も続く大切な神様の儀式だぞ。ちゃんと新聞記事にもなってるじゃないか」

カチンときた。写真の横に飾られた記事を指さして、ぼくは言った。

「君さあ、神様がいるって本気で信じてんの？」

宇希がぼくの顔をのぞきこんだ。<sup>⑥</sup>心を見すかされてしまいそうな、こわいほど真剣な目だ。

「あつ、あつたりまえだ」

声がかすれた。

「本当に神様がいるんなら、コロナウイルスなんてひとひねりだろ。人が亡くなったり、仕事をなくしたりして、辛い思いをする人たちがいるなんて、おかしいだろ」

宇希は唇をかむと、押し殺すように言った。

「なに……、すげえな、おまえ、そんなこと考えてんの？」

ぼくはほめたつもりなのに、宇希はぼくを横目でにらんだ。<sup>⑦</sup>くるつとまわれ右をすると、うわ履きのまま外に出ていった。

あれ、なにか悪いこと言ったわけ？

遠ざかる宇希の背中を見つめながら、ぼんやりと考えた。

なんで、神様はいるだなんて言っちゃったんだろう。

神様なんて、ぼくはこれっぽっちも信じていないのに。

なんだかいらいらする。あんなやつのこと、気にするだけ損だ。

### Ⅲ

と足音をたてて教室に向かった。

家に帰ると、母さんが納屋の整理をしていた。

「あら、どうしたの、えらくふてくされて。また、熱でもあるの？」

### Ⅱ

外に出ていった。

母さんは、エプロンで手を拭きふきやってきた。

「忍者屋敷に来た宇希って、X やつなんだ」

口が勝手に動きます。

「コト八日行事の写真を不思議そうにながめていたから教えてやったら、いつの時代だよってばかりにでき。くとまってるから感じ悪いよ」

Z だってき。都会っ子はお高

またいららがこみあげてきた。

「でもね、それも無理ないかもねえ。今の世の中、たいへんな思いをしている人はたくさんいるから」  
「たいへんな思いって？」

「コロナで、職を失う人もいるし、生きていくことさえ苦しい人も多いそうだしね。あの子の家族もそのあおりを受けて、ここに越してきたんじゃないかしら。日本料理の店を何軒も出して、幅広く経営されてたっていうから。その店も閉じるとなると、従業員の今後のこともあるだろうし、ずいぶんご苦労されてるんじゃないかしら」

母さんは深いため息をついた。

「店を閉じる……!？」

「本当のところはわからないわよ。面と向かって聞けるはなしでもないし。コロナもコトの神。人の力がおよばないってことでは、これも天災のひとつよね」

母さんはあいまいにうなずいた。

飲食店や、観光地が大変なことになっているのは、テレビで知っている。ぼくたちだって、学校は休校になったし、いろんな行事が取りやめになった。

毎日コロナ感染予防にも気をつけている。

でも、このあたりでは感染者も出ていないし、心の隅では、どこかよそのことって感じがしていた。

もし宇希の転校が、本当にコロナに関係しているとしたら……。

本当に神様がいらっしゃるなら、コロナウイルスなんてひとひねりだろ――。

辛い思いをする人たちがいるなんて、おかしいだろ。

押し殺したような宇希の声がよみがえる。ゆがんだ顔が浮かんでくる。

もしかして、そういうこと……？

なのにぼくは、偉<sup>えら</sup>そうに神様の説明なんてしちゃってさ。

「迷信だよな、めんどくさいだけだ」って、どうして素直<sup>すなお</sup>に言えなかったんだろ。

「こんな時代になっちゃったからね。来年のコト八日行事は、ほんとにやれるかどうかまだ決まっていようだけど、もしやれるようなら、コロナ退散の願いもこめていつも以上に、優斗たちには気合を入れてがんばってもらわないとね」

母さんは新聞紙の束を積むと、振りかえってぼくを見た。

「コロナ退散かあ、でっかいコトの神だなあ」

ぼくらが一生懸命<sup>いっしょうけんめい</sup>コトの神を集めて送れば、神様は苦しみからみんなを守ってくれるのかな。

⑧ 宇希の笑う顔を想像してみた。

でも、浮かんでくるのは、やっぱりつまらなそうな顔だけだ。

(熊谷千世子『風の神送れよ』より一部改変)

問一

I

III

に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、それぞれの記号は一度しか使えません。)

A どしどし

I かさかさ

U ずんずん

E ぴりぴり

O とぼとぼ

K じりじり

問二 —線①「その名こり」とはどのようなことですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 江戸時代、宇野原を通る街道は多くの人が行き来したため、様々な宗教が入ってきて、多様な神仏を信仰するようになったこと。
- イ 宇野原では、江戸時代に街道が地区の中央を通っており、そこを通る人々を守ってもらうために、神様や仏様を信仰してきたこと。
- ウ 江戸時代に大変栄えた、由緒ある古道を守るために、宇野原の人々は神仏の像をたくさん作り、その力に頼ってきたこと。
- エ 山あいであり、天竜川に守られている宇野原では、多くの人が行き来したにもかかわらず、自然がたくさん残っていること。
- オ 宇野原の峠道は足場が悪いので、多くの人が命を落としたが、神仏を祀ることで土地が清められ、多くの人で栄える街道となったこと。

問三 —線②「くちびるをとがらせて」—線③「鼻で笑って」の言葉の意味としてもっともふさわしいものはどれですか。後の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

②「くちびるをとがらせて」

- ア 怒りにまかせてものを言っている
- イ 不満そうにものを言っている
- ウ もうしわけなさそうにものを言っている
- エ 不安そうにものを言っている
- オ 甘えたようにものを言っている

③「鼻で笑って」

- ア 人なつこい態度をとっている
- イ 恥ずかしそうな態度をとっている
- ウ 軽べつした態度をとっている
- エ 思わせぶりの態度をとっている
- オ 強気な態度をとっている

問四 X (二か所) に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不気味な
- イ おもしろい
- ウ いいかげんな
- エ つまらない
- オ おかしな

問五 — 線④「できるだけ不機嫌ふきげんそうに言った」とありますが、それはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答

えなさい。

ア この地区のリーダーを困らせたのだということを強調することで、なまいきな宇希を自分に従したがわせようと思ったから。

イ みな心配したと強調することで、一人ぼっちのさみしさを感じている宇希をはげまし、かたくなな心をほぐしたいと思ったから。

ウ 不快な思いを持っているかのように強調することで、この後の宇希に対するなぐさめが効果的になるだろうと思ったから。

エ みなに迷惑めいわくがかかったということを強調することで、宇希に自らの行動を反省させ、感じの悪い態度を改めさせたいと思ったから。

オ みな困ったと強調することで、宇野原では集団生活がなによりも大事だと知らせ、宇希の単独行動をやめさせたいと思ったから。

問六 — 線⑤「言いかけた言葉を飲みこんで」とありますが、柚月が言いかけて飲みこんだ言葉はどのような内容だったと考えられますか。本

文全体をふまえ、自分で考えて答えなさい。

問七 

|   |
|---|
| Y |
|---|

 にはあることわざが入ります。 

|   |
|---|
| Y |
|---|

 に入ることわざとしてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神も仏もない

イ 仏の顔も三度まで

ウ 苦しい時の神頼かみだのみ

エ 地獄じごくで仏に会う

オ 触さわらぬ神にたたりなし

問八

——線⑥「心を見ずかされてしまいそう」とありますが、このときの優斗の「心」を説明したものとしてもつともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宇希のことを気にかけてコト八日行事の説明をしているように見せかけて、本当はただ自慢じまんしたい。

イ 大切な儀式として誇らしくコト八日行事を語っているけれども、本当は神様の存在など信じていない。

ウ この村で古くから続く儀式について教えることで、儀式について何も知らない宇希をばかにしてやりたい。

エ  
コト八日行事について偉そうに説明しているが、実は新聞を読んだだけで、儀式のことなどよくわかっていない。

オ 昔から続くコト八日行事は当然大切なものと思ひ込んでいたが、宇希に改めて疑問をぶつけられて、不安になっている。

問九

——線⑦「宇希はほくを横目でにらんだ」とありますが、宇希がこのような行動を取ったのはなぜだと考えられますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

何もわかっていない優斗の能天気さからくる無神経な発言に、腹立たしくなったから。

強い嫌悪感けんおかんをもっていた優斗に突然ほめられて、予想外のことにとまどったから。

ウ 何不自由なく育った、無邪気な優斗にばかりにされたので、くやしくなつたから。

工 自分のことしか考えない優斗が、本心からほめるわけではないと、その下心を見ぬいたから。

才敵対心をもっていた優斗に認められて、意地をはっていたことがはずかしくなったから。

問十

$$Z$$

に入るセリフとしてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これってさあ、なにしているところ？

イ  
ばかにするのいいかげんにしろよな

ウ　神様がいてるって本気で信じてんの？

工 本 本 当 に 神 様 が い る な ら 、 コ ロ ナ ウ イ ル ス な ん て ひ と ひ ね り だ ろ

オ そんなこと考えてんの？

問十一  
——線⑧「宇希の笑う顔を想像してみた」とありますが、なぜ優斗はこのような想像したと考えられますか。六〇字以内で説明しなさい。

〔三〕

次の(1)、(2)にそれぞれ答えなさい。

(1) 次の①～⑧の  に当てはまる言葉としてもつともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、それぞれの記号は一度しか使えません。)

- ① いつもと違う服で気を 。
- ② クラスメイトと将棋を 。
- ③ あまりの怒りに暴言を 。
- ④ 進路についての相談に 。
- ⑤ 休み時間に友人と相撲を 。
- ⑥ 夏休みに祖父と囲碁を 。
- ⑦ 肩で風を  頼もしい姿。
- ⑧ 根も葉もない噂が 。

ア きる    イ さす    ウ たつ    エ ひく    オ のる    カ うつ    キ とる    ク はく

(2) 次の――線について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① メイヤクを結んだ国。
- ② ヒグマのセイソクチを調べる。
- ③ ひざのカンセツが痛む。
- ④ 消化キカンの働きについて学ぶ。
- ⑤ 会計報告にカゴがあつた。
- ⑥ 無益な戦いをさける。
- ⑦ 八百屋でリングを買う。